

2020年10月
函館海上保安部

ようこそ葛登支岬灯台へ
～北斗市立石別小学校のみんなが見に来てくれました～

令和2年（2020年）10月30日（金）、北斗市にある葛登支（かっとし）岬灯台に、北斗市立石別（いしべつ）小学校の児童が見学に来てくれました。



これは、この小学校の「生活科並びに総合的な学習の時間」の一環であり、ふるさとのすばらしさや地域の学習素材を再発見しようとする取り組みの一つのことです。一行はバスで灯台近くまで来られ、まずは灯台の役目や仕組みなどを知ってもらった後、実際に灯台に登ってもらい、灯台から光を投げかける先の景色を見てもらいました。

石別小学校全校児童13名中、当日欠席した者を除き9名の児童と引率の先生や校長先生まで、合計20名に来ていただき、地元を知る学習として灯台を選んでもらったこと、そして灯台の上まで登りそこから眺めた景色、その沖を行き来する船がいたことなどいっしょに憶えていただけたらうれしい限りです。





この灯台は、明治18年（1885年）に初点灯していますが、これには多少前置きがあります。というのも、そこから遡ることおよそ20年、江戸時代が終わろうとする慶応2年（1866年）、江戸幕府は、アメリカ、イギリス、フランス、オランダとの間で「江戸条約」を結び、これにより8か所の「灯台」と2か所の「灯船」が設置されることとなりました。神奈川県三浦半島の先にある観音埼で我が国初の西洋式の灯台の建設が始まったのが、その2年後の明治元年（1868年）であり、これが8か所の「灯台」の魁（さきがけ）であり、また2つの「灯船」は横浜の本牧と箱館（当時）に決まりました。その一つ、「箱館灯船」というのは、長さ20m、約130トンの西洋木造船舶にマストを立て、その頂上に明かりを灯すもので、明治4年（1871年）、現在の函館どつくの北側に配置されました。



しかしながら、灯台と比べ、構造上の違いもあり、箱館灯船では光を1海里（約1.8km）しか届けることができず、明治以降海上交通が盛んになる函館港にとって十分な光とはならず、函館湾をはさんだ対岸に新たに「灯台」が建設されることとなり、それがこの葛登支岬灯台誕生のいきさつです。

葛登支岬灯台が建つ葛登支岬周辺の海岸一帯は岩礁が広がり、岸近くには白波が立っていると、この岬から沖合17.5海里（約32km）先まで白色の光を毎夜届けています。明治18年（1885年）の初点灯以来、昭和61年（1986年）までの一世紀にわたり職員が住み込み滞在を続けてきました。

灯台は海に臨んでいるところに所在し、絶景ポイントにある分不便なところが多く、当然灯台に行きつくまでの道や灯台の周辺は草が生え放題となり、海上保安部職員が定期点検のため巡回するたびに草刈りをしたりしています。ところが、この葛登支岬灯台は例外で、敷地の入り口は草刈りがなされ、季節を彩る花を植えたプランターが置かれるなど、とてもきれいに手入れされています。これらはひとえにボランティアの方々の貢献あってのもので、今回の石別小学校児童による灯台見学においても気持ちよく見ていただけたものと思っています。あらためて石別地区のボランティアの皆様に御礼申し上げます。



この灯台の存在については、所在する北斗市においても、トラピスト修道院と同様に観光資源としてみていただいております。先日、灯台入り口から入り階段を上りきると踊り場から広がる景色までの動画撮影をされ、現在編集集中とのことで、もう少しすると北斗市のホームページ You Tube に掲載されることと思います。

地域の皆様に協力していただきながら、引き続き函館湾を往来する船を見守っていきたいと思います。